

## Ⅱ. 解説

### 〔（１）記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択〕

#### 1. 琉球古典箏曲

##### （１）記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の概要

沖縄における<sup>そうきょく</sup>箏曲の歴史は、18世紀初頭、<sup>いなみねせいじゅん</sup>稲嶺盛淳が薩摩で習い覚えた十三弦<sup>こと</sup>の<sup>こと</sup>箏の曲を伝えたことに始まるとされる。1808年、<sup>さくほうし</sup>冊封使<sup>ことひき</sup>使<sup>ことひき</sup>の宴で琴弾役を務めた<sup>なかもとこうか</sup>仲本興嘉も薩摩で箏曲の教授を得ている。これら数次にわたり渡来したと考えられる曲には、箏の独奏曲10曲、すなわち器楽曲の「<sup>たきおとしすががき</sup>滝落菅攪」「<sup>じすががき</sup>地菅攪」「<sup>えどすががき</sup>江戸菅攪」「<sup>ひょうしすががき</sup>拍子菅攪」「<sup>さんやすががき</sup>佐武也菅攪」「<sup>ろくだんすががき</sup>六段菅攪」「<sup>しちだんすががき</sup>七段菅攪」、声楽曲の「<sup>せんどうぶし</sup>船頭節」「<sup>つしまぶし</sup>対馬節」「<sup>げんじぶし</sup>源氏節」があり、これらは、我が国の箏曲の歴史を知る上で貴重な伝承となっている。

一方、19世紀初めには<sup>さんしん</sup>三線との合奏が行われ始め、箏は三線と<sup>りゅうか</sup>琉歌による古典音楽の伴奏楽器として定着した。戦後は演奏人口が格段に増えたが、古典音楽や組踊<sup>おどり</sup>、<sup>りゅうきゅう</sup>琉球舞踊の伴奏楽器として演奏されることが<sup>もっぱ</sup>専らであり、独奏曲の演奏機会は減少している。

以上のように、琉球古典箏曲は、芸能の変遷の過程を知る上に貴重なものであるが、その技芸の伝承状況の危うさから、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選択しようとするものである。

##### （２）関係技芸者の団体

①名 称 <sup>りゅうきゅうそうきょくこうようかい</sup>琉球箏曲興陽会  
所 在 地 沖縄県中頭郡北谷町

②名 称 <sup>りゅうきゅうそうきょくほぞんかい</sup>琉球箏曲保存会  
所 在 地 沖縄県宜野湾市

③名 称 <sup>りゅうきゅうでんとうそうきょくりゅうげんかい</sup>琉球伝統箏曲琉絃会  
所 在 地 沖縄県那覇市

2. 参考 今回選択後の選択件数

区分	芸能	工芸技術	合計
選択件数	3 1	6 0	9 1